

ろう学校の中学生向け英語学習

中学1年生向けのルビふり教科書を手にする羽柴教諭。福井市の県立ろう学校で



耳の不自由な子どもたちの英語学習に役立ててもらおうと、県内の有志が中学校の英語の教科書に片仮名で単語の読み方を書いた「ルビふり教科書」の作成を進めている。現在の教科書にルビはなく、音を聞き取りづらい子どもたちが英文を読んだり、単語を発音したりする際に読み方が分からないことが課題となっていた。中心となって進める県立ろう学校の羽柴直弘教諭(33)は「学習に困っている子どもたちや、指導に悩む教員の力になりたい」と話している。(波多野智月)

ルビふり教科書`great`

グレイトウ
すばらしい

羽柴教諭ら県内有志が作成

「bothはボウス? ポース」と話す。「?」「スチューデントとストウ?」デントはどっちが自然かな」。一月中旬、福井市のコミュニケーションセンター「インターナショナルクラブ」に有志が集まり、教科書の英文を見ながら検討を進めた。naturalは「ナチュラル」、greatは「グレイトウ」。教科書の発音記号に可能な限り近くなるよう、単語一つ一つの読み方の表記を決める。

耳の不自由な子どもたちが英語を学ぶ際に壁になるのが発音だ。単語の読み方が分からず、喉の奥で発音する場合もあるため唇も読みづらい。羽柴教諭は「学習に消極的になったり、苦手意識につながってしまったたりする場合もある」と話している。

理由として「発音の指導がしやすい」「生徒が自宅学習で発音を確かめられる」と話す。富山、新潟四県の聴覚障害の子どもの通う学校六校の教員十人を対象に、ルビが必要かどうかをアンケートした。九割が「英語教材にルビがあった方がよい」と回答。

そこで昨年九月、福井、石川、富山、新潟四県の聴覚障害の子どもの通う学校六校の教員十人を対象に、ルビが必要かどうかをアンケートした。九割が「英語教材にルビがあった方がよい」と回答。



羽柴教諭が作った中学1年生向けのルビふり教科書=同教諭提供

「会話などコミュニケーションを重視した授業ができる」といったことを挙げた。また、ほとんどの教員が教科書に自分でルビを振ったり、黒板に読み方を板書したりしており、教員の負担増や授業効率の悪化につながっていることも明らかになった。

このほか、福井県立ろう学校の生徒を対象にしたアンケートでは、全員が単語にルビを振ったプリントの配布などを希望した。

現在は県内の英語講師などが協力し、中学2年生の教科書で作業を進めている。今年四月にも同校で使い始める計画で、今春をめどに同校のホームページにアップロードし、誰でも自由に閲覧できるようにする。



単語の読み方を検討する有志たち。福井市幾久町のインターナショナルクラブで

トンネル、北陸中部、全国のトン、で粉じんに、肺を患ったと、員らがセネ、賠償を求めた、じん肺根絶、となる北陸中、九人が一日、訴した。

提訴前には、援団体ら約四、裁前で横断、り、合格発表、験は仁愛女子、工大福井が、賀気比が十一、十五日に実施、も受けられな、に対応する。

調査書や面接、に可否を判断、

福井大、
県立大、
2次試験、
県内国公立、試験の願書受、目の一日、福、人、県立大に、敦賀市立看護、が新たに出席